

阿部 彩氏論文「子どもの貧困と健康への影響」についての若干のコメント

一橋大学経済研究所

小塩 隆士

1. 論文のポイント

- 「21世紀出生児パネル調査」個票データを用いて、子ども期のSESが子どもの健康に及ぼす影響を分析
- 最大の特徴：本格的なパネル分析
 - SES→健康という因果関係の抽出が可能
 - 健康ショックとSESの相互関連の分析が可能
 - 健康ショックそのものが重要なのか
 - それに対処するSESが重要なのか
 - 英米加の先行研究との比較

2. 得られた主要な結果

- 子どもの健康には所得階層間で格差がある
 - ただし、母親の学歴を制御すると有意でなくなる傾向
- 子どもの健康格差の経年的な拡大傾向は確認できず
- 過去の健康ショック×所得の交絡項の符号はプラス
 - 低所得ほど健康ショックにうまく対処

<コメント1>

- 母親の学歴を制御すると所得の影響がなくなるという、表2の結果は日本特有で、たいへん興味深い（基礎調査でも確認したいところだが、学歴を訊いていないのはつくづく残念）。
- しかし、これはいったい何を意味するのか。もう少し説明がほしい。health literacyの問題？
- そういう観点から表4（入院）を見ると、両親ともに学歴は有意でないし、付表3（慢性疾患）を見ると、両親ともに大卒ほど有病率は高い。これらの結果と表2の結果の関係は？

<コメント2>

- 過去の健康ショック×所得の交絡項の符号がプラスであることは、子どもの健康格差の経年的な拡大傾向が確認できないことと整合的。
- しかし、プラスの符号をどう解釈するか。過去の健康ショックで、医療サービスへのアクセスが密になり、SESショックの影響が減殺されるという経路——病気になることで、貧困ショックに立ち向かえる(?!)——が指摘されているが、これは医療政策から見て極めて面白い論点。もう少し突っ込めないか。医療保険加入状況・通院状況など。

<コメント3>

- 表2の結果は、学歴の制御の有無で大きく異なっていた。それを考えると、学歴を制御しない場合に、表4や付表3の結果がどう違ってくるかも興味深いところ。

<その他のコメント>

- 誕生後から現時点までの貧困状態の継続と現時点の健康の状態との関係も興味深い。例えば、各年齢時点における貧困ギャップ率の累計と、足元の貧困ギャップ率の説明力を比較してみてもは(先行研究は? Korenman and Millar, 1997?)。
- 付表3を見ると、父子家庭の子どもが慢性疾患をもつ確率がかなり低いですが、何か特別の理由があるのだろうか。

以上